

1 寺院の過去帳からみた在郷町の死亡構造 - 出羽国田川郡大山村の事例 -

阿 部 英 樹
杉 山 聖 子

はじめに

1) 課題と意義

本稿の課題は、庄内平野の在郷町を分析事例として、江戸時代末期の農村地域社会における死亡構造（＝死亡者の年齢別・性別・月別分布）を解明することである。

江戸時代には、何年かおきに発生する伝染病や凶作によって、死亡者が急増するという事態が繰り返されていた。なかでも享保・天明・天保といった飢饉、それを契機とした農民層の大量死亡については、知る人も多いことであろう。しかし、江戸時代における死亡者の動向や大量死亡の実態に注目し、具体的な史料分析に取り組んだ研究は意外に少ない。近年になって歴史人口学の研究分野で、江戸時代の人口動態解明の一環として、死亡動向や大量死亡を取り上げようとする動きもみられるが、発表された事例は限られている^(注1)。

こうした一般的な研究状況にくわえて、本稿は次のような意義を有すると考える。第1は、寺院過去帳を基礎史料として、死亡構造の分析を進めたことである。研究史料としての過去帳の有用性は早くから認められていた^(注2)。しかし、公開上の厳しい制約があるうえ、多くの場合、死亡者数の背景となる檀家人口が不明という欠点^(注3)を持つため、過去帳の研究利用は停滞してきた。最近、歴史人口学の研究者によって、江戸時代における死亡者数の把握にあたっては、宗門改帳よりも過去帳の方が有用との再評価^(注4)もなされているが、依然として研究利用は立ち遅れたままである。したがって1寺院の過去帳とはいえ、本稿でその分析結果を紹介することに、一定の意義はありえよう。

第2は、江戸末期の庄内平野を分析対象に、農民層の死亡構造の解明を試みたことで

ある。山形県の北西部、日本海に面した庄内平野は、農地改革以前、大小の地主群を擁した地主地帯であった。千町歩地主・本間家をはじめ、戦前の庄内平野に存在した大地主の多くが、江戸末期までにその大土地所有の基礎を固めていた。そうした地主制形成の歴史的背景もあって、江戸後期の庄内平野に関しては、農業生産構造、農民層分解等を中心に、豊富な研究蓄積が存在する^(注5)。しかし、農民の死亡実態に直接関わるような記述はほとんどみられない。庄内地域史研究の欠落部分を補い、死亡構造の地域的特質を追究するという観点から、本稿分析の意義は小さくないといえる。

2) 専念寺と大山村

本稿では、出羽国田川郡大山村（現・山形県鶴岡市大山地区）の1寺院過去帳を基礎史料として、死亡構造の解明を進める。1寺院とは大山村西町、加茂街道沿いの浄土宗・専念寺^(注6)である。江戸後期、大山村の寺院は10ヶ寺ほどを数えたが、専念寺の場合、過去帳に酒屋等、大山村の有力商家名が多数見受けられることから、商人を檀家の中心層とする寺であったと考えられる。

専念寺が所在し、その檀家が居住する大山村^(注7)は、庄内平野の南西部に位置していた。中世には武藤氏の城下町であり、江戸前期には一時、大山藩1万石の城下町であったが、寛文9年（1699）の同藩改易後は周辺の村々とともに幕府領となった。大山村に代官手附・手代の陣屋が置かれた時期もあり、庄内の幕府領支配の中心地として機能したが、元治元年（1864）庄内藩への増封に伴って、大山村をはじめ庄内の幕府領は庄内藩領となった。

大山村は鶴岡街道・湯田川街道・三瀬街道・加茂街道・酒田街道等、庄内地方の諸街道が交差する交通の要地にあり、越後と秋田を結ぶ宿駅でもあった。そのため江戸後期には、商品流通の活発化に伴って町場化が進行し、在郷町としての性格を強めた。

大山村の村民諸階層を特徴づけたのが、百姓身分の商人や職人の多さであり、その上層に位置する酒屋の存在であった。江戸中期以降の酒屋数は40軒前後で、その生産高は天保年間、3分の1、3分の2等の減石を命じられながらも、6,000石から7,000石に達していた。こうした酒造業の繁栄を背景に、職人稼業や諸商売も活況を呈していた。また専門的にそれらに従事する者の外、田畑を所持する農家のなかにも、農外稼業に従事する者が多かった。男女ともに耕作のかたわら、鶴岡城下や周辺村へ小商いに出たと伝えられている。

大山村の規模をみておくと、江戸末期の村高は1,913石余で、村内17の町からなってい

た。家数・人口に関する情報は非常に少なく、宝暦11年(1761)の家数703軒・人口2,844人、弘化3年(1846)の家数667軒、人口2,911人という数値が判明するだけである。85年間で、家数は36軒の減少、人口は67人の増加となっている。この数値から、本稿が分析対象とした江戸末期～明治初年の大山村について、あくまで暫定的ではあるが、弘化3年(1846)当時の家数・人口規模での停滞を仮定しておく。

(注1) 鬼頭(2000) 156 - 185頁、高木(1996) 1 - 32頁、木下(2002) 23 - 43頁、浜野(2001) 173 - 192頁、杉山(2004) 38 - 48頁などがある。

(注2) 過去帳の研究事例として、古くは丸山(1960) 代表的なものは須田(1973) 菊池(1980・1986) 近年では大柴(1999) 杉山(2004) が挙げられる。

(注3) この点は、大柴(1999) および齋藤(1987) 等で指摘されている。

(注4) この点は、宗門改帳と過去帳とを同時に使用した高木(1996) にくわしい。

(注5) 庄内地主制の歴史的特質や研究状況について、くわしくは阿部(1994)の各章を参照されたい。

(注6) 専念寺は、大山町史刊行委員会(1968) 418頁、平凡社(1990) 719頁に紹介されている。

(注7) ここでの大山村に関する記述は、山形県(1987) 611 - 621頁に基づいている。

死亡動向

1) 専念寺過去帳にみる死亡者数の推移

過去帳とは、仏教寺院に保管され、歴代住職によって書き継がれる死亡者の登録簿である。宗派や住職によって記載内容は異なるが、死亡実態の研究史料としてみれば、命日・俗名・戒名・性別・年齢等の有益な情報を得ることができる。ただし現在、過去帳の管理は厳重となり、研究利用といえども、容易に閲覧が許されなくなっている。本稿で利用した専念寺過去帳は、鶴岡市郷土資料館に寄託された専念寺文書に含まれるものである。

専念寺過去帳には、文政7年(1824)から明治13年(1880)の57ヶ年にわたって、1,575人の死亡者が記録されている。そのうちから、大山村現住者の死亡実態に焦点をあてるという観点で、他所での死亡例や外来者の死亡例など84人^(注1)を除外し、残った1,491人の死亡者情報を分析対象とした。

図2 - 1は、年々の死亡者数を図示することによって、57ヶ年にわたる死亡者の推移をたどったものである。1寺院の過去帳に過ぎず、檀家の多くが商人層であったという前提条件はあるものの、大山村の死亡動向を概観するうえで重要な情報となる。死亡者数の基礎となる檀家戸数・人数は把握できないが、前述のとおり、ひとまず分析期間中の村人口はほぼ停滞していたと仮定しておく。

図2 - 1をみたとき、死亡者数の推移に関して、いくつかの特徴点を指摘することができる。最も明らかな特徴は、分析期間中を通じて、何年かの間隔で死亡者数の急増が繰り返されていることである。これが先行研究のいう「死亡数の鋸歯状の大きな変動」^(注2)で、全国各地の事例にみられ、江戸期の死亡動向に関する共通的傾向と認められている。

また明治に入ったからといって、死亡者が減少していく傾向は現れていない。本稿分析の下限となった明治13年(1880)ごろまでは、江戸期とほぼ同様の死亡実態が持続していたということであろう。

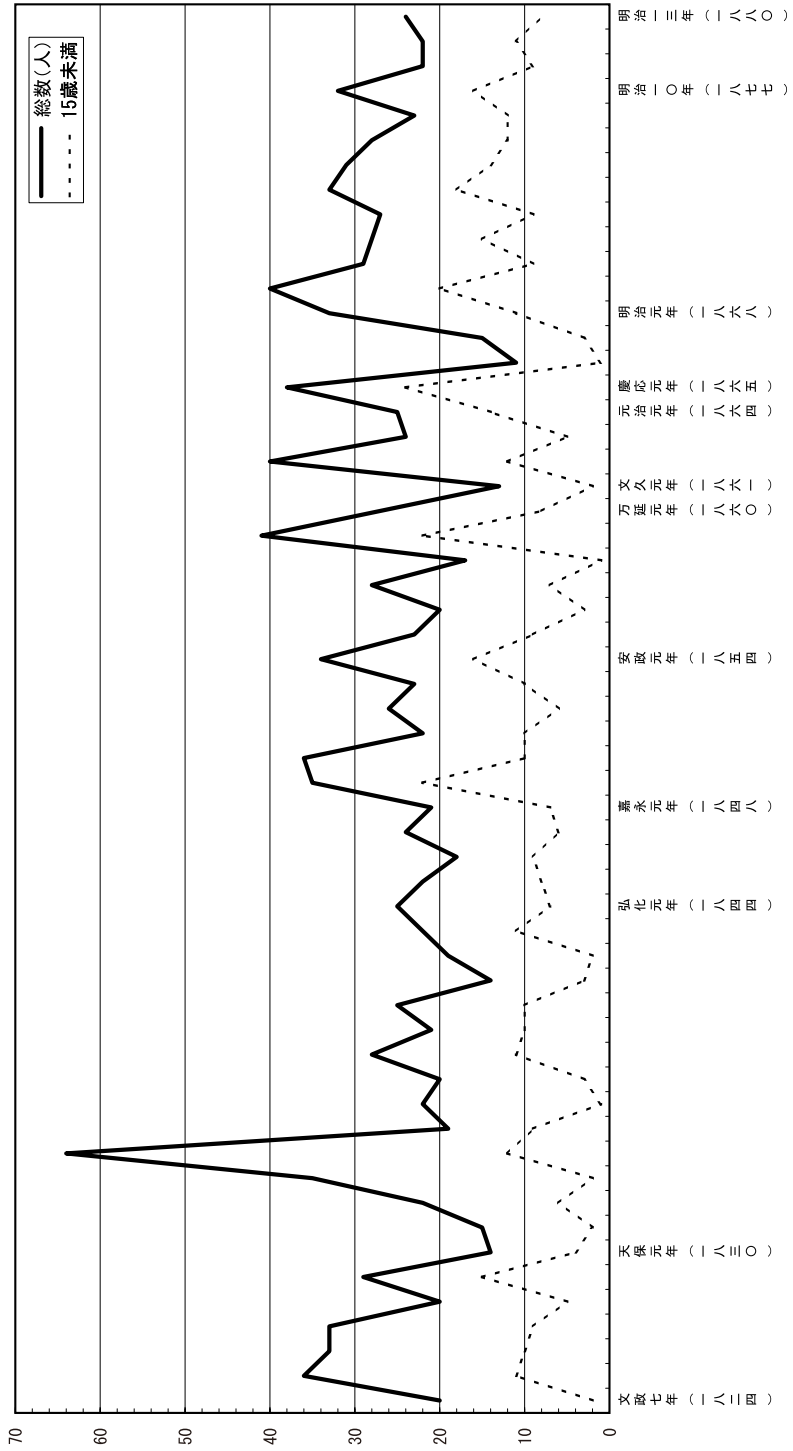
図2 - 1において、死亡者総数とは別に、15歳未満の死亡者数^(注3)を示しておいた。両数値の推移を対比すると、死亡実態を特徴づける「死亡数の鋸歯状の大きな変動」に関連して、その主要な要因が明確となる。何年かの間隔で繰り返される死亡者数の急増は、多くの場合、もっぱら15歳未満の死亡者数の増加によって引き起こされていたのである。こうした年少の死亡者、つまり子供の死亡者が多かったことは、先行研究でもしばしば指摘されており、いわば死亡構造の江戸期的特質として広く認められている^(注4)。

2) 専念寺の死亡者指数

過去帳に記載された死亡者数をたどるだけでも、江戸期の死亡構造に関わる特質を指摘することができた。しかし、それらは他地域をあつかった先行研究の報告とほぼ共通したものであり、大山村あるいは庄内農村の死亡構造に関して、固有の地域的特質を明らかにしたとはいえない。そこで死亡者の実数にかえて、死亡者指数^(注5)なる指標を採用し、分析を深めていくことにする。

死亡者指数によれば、平常な死亡数を基準に異常な死亡数の増加がほぼ正確に確定できるだけでなく、さらに過去帳特有の史料的欠点を補える。すでに述べたように、多くの過去帳では死亡者数の基礎人口に当たる檀家人口が不明なため、分析内容が制限される。たとえば死亡率の算定が容易ではない。この欠点は専念寺過去帳も同様で、分析期間中における檀家戸数・人数等の情報は皆無に近い。しかし死亡者指数を用いれば、

図2 - 1 専念寺における死亡者数の推移



本稿課題のような死亡構造の分析上、ほとんど支障はないのである。

専念寺過去帳の場合、分析期間とした文政7年(1824)から明治13年(1880)の57ヶ年を対象に、まず1ヶ年当たりの平均死亡者数26.2人を求めた。各年次の死亡者数を、この26.2人で割ったものが死亡者指数となる。それを指標に死亡発生に関する高死亡年・平常年を確定した。

具体的には、1.5以上を高死亡年、1.2以上1.5未満を中死亡年、1.2未満を平常年と区分した。1.5以上の高死亡年とは、平年の水準を50%以上うわまわる死亡者増がみられた年次であり、歴史人口学でいう死亡クライシスの発生^(注6)を意味している。

表2-1は、専念寺の死亡者指数を上位の年次から表示したものである。指数1.0以上の年次を全て掲げた(以下の各表も同じ)。ちなみに最高は天保5年(1834)の2.45、最低は慶応2年(1866)の0.42であった。57ヶ年中の内訳は高死亡年4ヶ年(7.0%)、中死亡年11ヶ年(19.3%)、平常年42ヶ年(73.7%)で、10数年に1度は高死亡年が発生し、大量死亡に見舞われていたことになる。大山村における死亡動向の特徴として、とくに注目しておきたい。

表2-1には各年次について、庄内地域史の刊行史料等^(注7)に基づき、死亡実態に関連すると思われる参照事項を記しておいた。実に興味深いのは、高死亡年や中死亡年の上位年にあげられた参照事項が、死亡者の増加という事態と、かなりの整合性を持っていると考えられることである。

天保5年(1834)の悪風・疫病流行、安政6年(1859)のころり病、文久2年(1862)のハシカ・コロリ・麻疹は、高死亡年においてどのような事情で死亡者急増が起こったのかを考察するうえで、重要な情報を得たことになる。また、中死亡年の嘉永3年(1850)・天保4年(1833)における凶作、平常年の万延元年(1860)における疱瘡・麻疹などの情報も有益である。それらがさほど死亡数に反映していないとしても、各年次への影響度をみることによって、大山村独自の傾向をとらえることができよう。

全死亡者を対象とした表2-1の死亡者指数に加え、15歳未満の死亡者(分析の便宜上、年少者と称する場合がある)15歳以上の男性死亡者(成人男性と称する場合がある、女性も同じ)15歳以上の女性死亡者という区分ごとに、指数を算出してみた。死亡者指数に表れた年齢差・男女差から死亡構造に接近するためである。結果はそれぞれ表2-2・2-3・2-4に示した。表中の番号は、表2-1の上位15ヶ年に当たり、番号を付した年次は全死亡者対象の高死亡年(番号1~4)、中死亡年(番号5~15)と共通している。

表 2 - 1 専念寺の死亡者指数（全死亡者）

	番号	和暦（西暦）	総数	指数	備考
高死亡年	1	天保 5 年 (1834)	64	2.45	悪風流行(万世見聞相場記)、疫病大流行(咄の種瓢)
	2	安政 6 年 (1859)	41	1.57	ころり病流行(万世見聞相場記・咄の種瓢)
	3	文久 2 年 (1862)	40	1.53	大凶作・ハシカ流行・コロリ(万世見聞相場記)、傷寒・コロリ・麻疹と三病一度二流行(堀文庵日記)
	4	明治 2 年 (1869)	40	1.53	
中死亡年	5	慶応元年 (1865)	38	1.45	疱瘡流行(堀文庵日記・咄の種瓢)
	6	文政 8 年 (1825)	36	1.38	
	7	嘉永 3 年 (1850)	36	1.38	凶作(万世見聞相場記・咄の種瓢)
	8	天保 4 年 (1833)	35	1.34	凶作(大山町史・万世見聞相場記)、大飢饉(咄の種瓢)
	9	嘉永 2 年 (1849)	35	1.34	
	10	安政元年 (1854)	34	1.30	地震・洪水(万世見聞相場記・咄の種瓢)
	11	文政 9 年 (1826)	33	1.26	
	12	文政10年 (1827)	33	1.26	
	13	明治元年 (1868)	33	1.26	
	14	明治 6 年 (1873)	33	1.26	
	15	明治10年 (1877)	32	1.22	
平常年		明治 7 年 (1874)	31	1.19	
		文政12年 (1829)	29	1.11	
		明治 3 年 (1870)	29	1.11	
		天保 9 年 (1838)	28	1.07	
		安政 4 年 (1857)	28	1.07	風流行(万世見聞相場記)
		明治 4 年 (1871)	28	1.07	
		明治 8 年 (1875)	28	1.07	
		万延元年 (1860)	27	1.03	疱瘡・麻疹流行(咄の種瓢・堀文庵日記)、大洪水(万世見聞相場記・堀文庵日記)
		明治 5 年 (1872)	27	1.03	
平均			26.2人		

表示内容をみたととき、まず目につくのが、15歳未満における高死亡年の多さであろう。57ヶ年中、11ヶ年(19.3%)に達している。15歳以上男性でのそれは6ヶ年(10.5%)、15歳以上女性では5ヶ年(8.8%)であった。15歳以上層いわば当時の成人層に比して、15歳未満の年少層では、明らかに大量死亡が多発していた。前節の分析中で、図 2 - 1 にみられる死亡者数の大きな変動は、もっぱら15歳未満の死亡者増加によって発生したと述べておいた。その傾向が死亡者指数からも再確認できたといえよう。つまり全体の

表 2 - 2 15歳未満の死亡者指数

	番号	和暦(西暦)	15歳未満	指数
高死亡年	5	慶応元年(1865)	24	2.61
	9	嘉永2年(1849)	22	2.39
	2	安政6年(1859)	22	2.39
	4	明治2年(1869)	20	2.18
	14	明治6年(1873)	18	1.96
	10	安政元年(1854)	16	1.74
	15	明治10年(1877)	16	1.74
		文政12年(1829)	15	1.63
		明治4年(1871)	15	1.63
		元治元年(1864)	14	1.52
	明治7年(1874)	14	1.52	
中死亡年	1	天保5年(1834)	12	1.31
	3	文久2年(1862)	12	1.31
		明治8年(1875)	12	1.31
		明治9年(1876)	12	1.31
	6	文政8年(1825)	11	1.20
		天保9年(1838)	11	1.20
		天保14年(1843)	11	1.20
	13	明治元年(1868)	11	1.20
	明治12年(1879)	11	1.20	
平常年	11	文政9年(1826)	10	1.09
		天保10年(1839)	10	1.09
		天保11年(1840)	10	1.09
	7	嘉永3年(1850)	10	1.09
		嘉永4年(1851)	10	1.09
		嘉永6年(1853)	10	1.09
平均			9.2人	

表 2 - 3 成人男性の死亡者指数

	番号	和暦(西暦)	男性	指数
高死亡年	1	天保5年(1834)	25	2.90
	8	天保4年(1833)	18	2.09
	6	文政8年(1825)	16	1.85
	7	嘉永3年(1850)	15	1.74
	12	文政10年(1827)	14	1.62
		文政7年(1824)	13	1.51
中死亡年	11	文政9年(1826)	12	1.39
		安政4年(1857)	12	1.39
		文久3年(1863)	12	1.39
		天保9年(1838)	11	1.27
		天保10年(1839)	11	1.27
	3	文久2年(1862)	11	1.27
	4	明治2年(1869)	11	1.27
	明治13年(1880)	11	1.27	
平常年		文政11年(1828)	10	1.16
		嘉永5年(1852)	10	1.16
	2	安政6年(1859)	10	1.16
	5	慶応元年(1865)	10	1.16
		明治3年(1870)	10	1.16
		明治7年(1874)	10	1.16
		天保11年(1840)	9	1.04
		安政3年(1856)	9	1.04
		安政5年(1858)	9	1.04
		明治5年(1872)	9	1.04
平均			8.6人	

死亡者数の動向は、15歳未満の死亡者数の推移に大きく影響されていたのである。

さらに各表の年次を、表 2 - 1 のものに比較すると、それぞれに特徴的な傾向が明らかとなる。死亡構造に関わる、最も重要な傾向だけを指摘しておく。

最初に番号を付した年次からみると、全死亡者を対象とした高死亡年4ヶ年が、必ずしも15歳未満の年少者、15歳以上の成人男性・女性における高死亡年と重複しているものではないことが分かる。4ヶ年のうち、最高の死亡者指数を示した天保5年(1834)は、成人男性・女性だけをそれぞれ対象とした指数においても、最高値となっている。しか

し15歳未満の年少死亡者では、中死亡年にとどまる。また安政6年(1859)と明治2年(1869)は年少死亡者の高死亡年に登場するが、成人男性・女性のものには現れない。文久2年(1862)は、成人女性にみられるだけである。

これらの傾向が、各高死亡年における死亡実態を反映することは、容易に察せられよう。次章でも述べるように、死亡者を年齢別に区分してみれば、天保5年(1834)はもっぱら成人層に、安政6年(1859)と明治2年(1869)は年少層を中心に、文久2年(1862)は成人女性層に偏って、死亡者の増加が認められるのである。それらには表2-1に掲げた各年次の参照事項が影響していたのではないだろうか。各高死亡年の死亡構造を解明するにあたっては、こうした年次ごとの死亡実態の違いを重視すべきなのであろう。

死亡者指数における年齢差・男女差は大きく、各表で番号が付されていない年次、つまり全死亡者を対象とした平常年の異同をみても、かなりの差異が読み取

れる。死亡者指数からみえてくる死亡実態は年齢や性別で異なり、複雑な傾向を示していた。なかでも、全死亡者の死亡者指数では中死亡年や平常年にとどまる年次が、年少者・成人男性・女性の各高死亡年に登場する例が目立ち、特徴的でさえある。4ヶ年を数える15歳未満の年少層の高死亡年、あるいは天保4年(1833)のような15歳以上の成人層のもの、また文政7年(1824)は成人男性だけ、天保7年(1836)は成人女性だけの高死亡年、等が確かめられる。伝染病等の影響が、特定の性別や年齢層だけに死亡者を増加させ、その年の死亡実態を特徴づけたと予測することもできよう。

表2-4 成人女性の死亡者指数

	番号	和暦(西暦)	女性	指数
高死亡年	1	天保5年(1834)	27	3.24
	3	文久2年(1862)	17	2.04
	8	天保4年(1833)	15	1.80
	13	明治元年(1868)	14	1.68
		天保7年(1836)	13	1.56
中死亡年	10	安政元年(1854)	12	1.44
		万延元年(1860)	12	1.44
		明治8年(1875)	12	1.44
	11	文政9年(1826)	11	1.32
		天保3年(1832)	11	1.32
		天保13年(1842)	11	1.32
	7	嘉永3年(1850)	11	1.32
		12	文政10年(1827)	10
	弘化元年(1844)		10	1.20
	弘化4年(1847)		10	1.20
	嘉永5年(1852)		10	1.20
	明治3年(1870)		10	1.20
平常年	6	文政8年(1825)	9	1.08
		文政12年(1829)	9	1.08
		天保8年(1837)	9	1.08
	2	安政4年(1857)	9	1.08
		安政6年(1859)	9	1.08
	4	明治2年(1869)	9	1.08
		明治5年(1872)	9	1.08
	14	明治6年(1873)	9	1.08
		15	明治10年(1877)	9
	平均			8.3人

3) 死亡者指数にあらわれた死亡実態の地域性

ここでは死亡実態の地域性という問題を取り上げる。前節で判明した専念寺の高死亡年を、庄内地方の各寺院のものと比較することによって、死亡実態の有した複雑な地域性を確認しておきたい。

歴史人口学の研究者^(注8)は、江戸後期の死亡実態に地域差が大きかったことを強調している。全国的な地域差だけでなく、たとえば同じ郡内の近接した村落間・領域間で異なる実態がみられ、大量死亡の発生も局地的現象となる場合すらあった等と指摘されることも多い。しかし、近接した村落間のように比較的狭い領域内での地域差になると、史料的な制約から死亡者数の把握や比較が難しく、具体的な数値をあげた研究報告は非常に少ない。

菊池(1986)に収録された庄内地方の寺院死亡者数から、各寺院の死亡者指数表、すなわち妙法寺の表2-5、光岩寺の表2-6、総光寺の表2-7、長秀寺の表2-8、宝護寺の表2-9を作成した^(注9)。専念寺の場合と全く同様に、分析期間は文政7年(1824)から明治13年(1880)の57ヶ年とし、死亡者指数を算出・区分したものである。各表中の番号は、専念寺における死亡者指数の上位15ヶ年、すなわち1~4が同寺の高死亡年、5~15が中死亡年を示している(表2-1参照)。

庄内平野は最上川によって、ほぼ南北に分断されている。江戸後期の庄内地方は、それを境に「庄内二郡」と称された2つの郡に分けられていた。北の飽海郡と南の田川郡である。表示した5ヶ寺のうち、妙法寺・光岩寺・総光寺・長秀寺は最上川以北の飽海郡にあり、宝護寺は専念寺と同じ最上川以南の田川郡にあった。

表2-5 妙法寺の死亡者指数

	番号	和暦(西暦)	飽海郡・酒田寺町 妙法寺	
			死亡者数	指数
高死亡年	1	天保5年(1834)	179	2.14
		天保9年(1838)	144	1.72
	5	慶応元年(1865)	138	1.65
	9	嘉永2年(1849)	126	1.51
中死亡年	3	天保14年(1843)	124	1.48
		文久2年(1862)	119	1.42
		万延元年(1860)	116	1.39
	10	明治8年(1875)	116	1.39
		文政7年(1824)	111	1.33
		安政元年(1854)	102	1.22
		弘化元年(1844)	100	1.20
2	安政6年(1859)	100	1.20	
平常年	8	天保4年(1833)	99	1.18
		嘉永5年(1852)	94	1.12
		明治7年(1874)	94	1.12
	13	天保元年(1830)	89	1.06
		安政5年(1858)	87	1.04
		明治11年(1878)	87	1.04
		明治元年(1868)	86	1.03
	安政4年(1857)	85	1.02	
平均			83.6人	

表 2 - 6 光岩寺の死亡者指数

	番号	和暦（西暦）	飽海郡・宮野内村 光岩寺		
高死亡年	2	明治12年(1879)	76	3.15	
		安政6年(1859)	50	2.07	
	1	天保5年(1834)	45	1.87	
		天保8年(1837)	38	1.58	
	3	文久2年(1862)	37	1.54	
中死亡年	5	慶応元年(1865)	33	1.37	
		明治10年(1877)	32	1.33	
	14	天保10年(1839)	31	1.29	
		明治9年(1876)	31	1.29	
		明治6年(1873)	30	1.24	
		明治13年(1880)	29	1.20	
平常年	4	明治2年(1869)	28	1.16	
		明治3年(1870)	27	1.12	
		安政2年(1855)	26	1.08	
	9	明治8年(1875)	26	1.08	
		天保元年(1830)	25	1.04	
		嘉永2年(1849)	25	1.04	
		7	嘉永3年(1850)	25	1.04
			明治7年(1874)	25	1.04
		天保3年(1832)	24	1.00	
		弘化3年(1846)	24	1.00	
		安政4年(1857)	24	1.00	
		万延元年(1860)	24	1.00	
		平均			24.1人

表 2 - 7 総光寺の死亡者指数

	番号	和暦（西暦）	飽海郡・松山城下 総光寺	
高死亡年	3	文久2年(1862)	82	2.45
		天保5年(1834)	70	2.09
	1	明治8年(1875)	58	1.73
		安政6年(1859)	51	1.52
中死亡年	5	明治13年(1880)	42	1.26
		万延元年(1860)	41	1.23
	14	慶応元年(1865)	41	1.23
		明治6年(1873)	41	1.23
		天保3年(1832)	40	1.20
		明治7年(1874)	40	1.20
平常年	15	天保8年(1837)	39	1.17
		嘉永6年(1853)	39	1.17
		明治9年(1876)	39	1.17
		明治11年(1878)	37	1.11
		文政7年(1824)	36	1.08
		天保元年(1830)	36	1.08
		弘化2年(1845)	36	1.08
		嘉永5年(1852)	36	1.08
		文久3年(1863)	36	1.08
		明治10年(1877)	36	1.08
	13	天保9年(1838)	35	1.05
		明治元年(1868)	35	1.05
		慶応3年(1867)	34	1.02
		明治12年(1879)	34	1.02
		平均		

専念寺とこの5ヶ寺との間で、死亡者指数や高死亡年を比較することに全く問題がないわけではない。予め断っておかなければならないのは、死亡数以外、各寺の情報が皆無に等しいことである。そのため、寺ごとの立地上の特徴を考慮することはできない。また、専念寺の檀家に在郷町の商人層が多かったというような、各檀家集団の性格等も考察の外におかざるを得ない^(注10)。しかし、これらの制約があるにしても、各寺の死亡者指数は基本的に、その所在地周辺（正確には檀家集団の居住地）の死亡動向を反映するものであるから、高死亡年の比較・対照を進めると、死亡実態の地域差が明らかとなった。

表 2 - 8 長秀寺の死亡者指数

	番号	和暦 (西暦)	飽海郡・中北目村 長秀寺	
高死亡年	1	天保11年(1840)	45	2.14
		天保5年(1834)	43	2.05
		天保14年(1843)	38	1.81
		文久3年(1863)	38	1.81
		嘉永5年(1852)	32	1.52
中死亡年	10	天保8年(1837)	30	1.43
		安政元年(1854)	30	1.43
	3	安政2年(1855)	30	1.43
		文久2年(1862)	30	1.43
	7 14	明治8年(1875)	28	1.33
		嘉永3年(1850)	26	1.24
		明治6年(1873)	26	1.24
		明治9年(1876)	26	1.24
平常年	15	弘化元年(1844)	25	1.19
		慶応2年(1866)	25	1.19
		明治12年(1879)	25	1.19
		天保6年(1835)	24	1.14
	9	明治10年(1877)	24	1.14
		嘉永2年(1849)	23	1.09
		安政4年(1857)	23	1.09
		天保元年(1830)	22	1.05
		天保2年(1831)	22	1.05
		明治2年(1869)	22	1.05
		天保9年(1838)	21	1.00
		万延元年(1860)	21	1.00
平均			21人	

表 2 - 9 宝護寺の死亡者指数

	番号	和暦 (西暦)	田川郡・興屋村 宝護寺	
高死亡年	3	明治12年(1879)	86	1.76
		天保11年(1840)	76	1.56
		文久2年(1862)	75	1.54
中死亡年	14	天保8年(1837)	71	1.46
		明治6年(1873)	68	1.39
	2	慶応2年(1866)	65	1.33
		安政6年(1859)	64	1.31
		明治8年(1875)	64	1.31
	13 4	天保9年(1838)	60	1.23
		明治元年(1868)	60	1.23
		明治2年(1869)	60	1.23
		明治3年(1870)	60	1.23
	平常年	1	万延元年(1860)	57
明治7年(1874)			57	1.17
明治13年(1880)			56	1.15
天保5年(1834)			55	1.13
天保14年(1843)			53	1.09
嘉永6年(1853)			53	1.09
明治9年(1876)			53	1.09
安政4年(1857)			52	1.07
6 15		天保6年(1835)	51	1.05
		文政8年(1825)	50	1.03
		明治10年(1877)	50	1.03
		元治元年(1864)	49	1.01
平均			48.8人	

まず、表示の5ヶ寺と専念寺について、対象期間57ヶ年中に占める高死亡年の割合を比べると、妙法寺・総光寺が専念寺と同じ4ヶ年(7.0%)、光岩寺・長秀寺が5ヶ年(8.8%)、宝護寺が3ヶ年(5.3%)となっている。最後の宝護寺を除き、他の寺々は4・5ヶ年で一致しており、期間中ほぼ同一の頻度で高死亡年が発生していたことになる。前節で専念寺の数値を踏まえ、大山村の死亡動向の特徴点として、10数年に一度は大量死亡に見舞われたことを指摘しておいた。各寺々の所在地においても、ほぼ同様の傾向がみられたのであり、江戸末期の庄内地方に広く共通する地域的傾向として強調できよう。

ただし、これはあくまで高死亡年の発生頻度という数値上だけの傾向であって、高死亡年の年次構成は各寺ごとに異なっていた。6つの寺の高死亡年を一覧すると、高死亡年の共通性を指摘できる一方で、各寺ごとに独自の傾向も認められるようである。そこで、専念寺の高死亡年4ヶ年（番号1～4を付した年次）が、各寺の死亡者指数でどうなっているかみていこう。

高死亡年4ヶ年のうち、天保5年(1834)は4ヶ寺の高死亡年に登場し、安政6年(1859)は2ヶ寺、文久2年(1862)は3ヶ寺の高死亡年でみられる。明治2年(1869)は、どの寺にも現れておらず、専念寺独自の高死亡年となっている。この結果から、天保5年(1834)・安政6年(1859)・文久2年(1862)の3ヶ年は、庄内地方に共通する高死亡年であったことが明らかになる。とりわけ天保5年(1834)は江戸末期を代表する高死亡年であり、多くの村々で大量死亡がみられたのであろう。

このように興味深い傾向として、各寺の高死亡年には専念寺との重複年が存在する。しかし、その一方で長秀寺・宝護寺で目につくように、それ以外の年次も少なからず認められる。くわしく述べれば、専念寺の高死亡年について、4ヶ年の全てを高死亡年に含んだ寺はない。光岩寺・総光寺では3ヶ年までを含むが、他の3つの寺ではわずかに1ヶ年を含むだけで、他の年次が入っている。死亡実態の地域差を考えるうえでは、高死亡年の共通性よりは、こうした高死亡年のバラツキという傾向に注目する必要がある。

これには第1に、専念寺の明治2年(1869)のような、それぞれの寺単位での独自の高死亡年が少なくないこと、言い換えれば、広範囲に共通する大量死亡とは異なる、比較的狭い範囲での、局地的な大量死亡の発生が影響していた。そして第2に、先の3ヶ年以外に、対象期間中の庄内地方に共通したであろう高死亡年の存在が関係していた。後の点を補足しておけば、明治12年(1879)は光岩寺・宝護寺に重複する高死亡年であり、両寺でともに最高の死亡者指数を示す年次となっている^(注11)。また天保11年(1840)も、長秀寺・宝護寺の高死亡年に重複して現れている。専念寺の場合、どちらの年次も平常年であり、死亡者数の増加はみられなかった。

これらの意味するところは重要である。同じ庄内地方にあっても死亡実態の地域差は大きく、江戸後期の庄内農村は死亡実態の多様性をもって、その特徴としたということが出来る。そして、大量死亡を引き起こしたであろう要因、すなわち表2-1に掲げたような参照事項の影響は、庄内地方の内部で、村や地域ごとに大きく異なっていたということであろう。このことは、江戸末期を代表する高死亡年とみた天保5年(1834)に

ついて、各寺ごとの死亡者指数がかなり上下することにも端的にしめされていよう。

- (注1) 他所の死亡例は73件、外来者の死亡例は11件を数える。他所の死亡例の大部分は鶴岡城下でのものであったが、大山騒動の首謀者として江戸入牢中に獄死した墨井弥左衛門、鈴木庄兵衛の両名も載せられている。また、外来者の死亡例には戊辰戦争の時、大山村の寺々に分宿し、戦傷死した伊勢桑名藩士10名が含まれている。
- (注2) たとえば鬼頭宏は、「死亡数の鋸歯状の大きな変動こそ、前工業化社会の特徴であった」と述べている(鬼頭、2000、158頁)。
- (注3) 専念寺過去帳においては、全死亡者に死亡年齢が記載されているわけではない。その記載率は全死亡者の61.4%にとどまっている。そこで記載例と、各死亡者の戒名を照合しながら、大まかな年齢区分を設定することにした。江戸期の戒名については、一般的な傾向として14歳までは童子・童女、15歳以上には信士・信女が与えられたといわれている。この点は、圭室(1999) 192頁および大柴(1999)参照。専念寺の記載例も同様の傾向を示していた。本稿分析では、童子・童女、孩子・孩女などを15歳未満の年少死亡者として一括し、信士・信女を15歳以上の成人死亡者として一括することにした。なお本稿での年齢表記は、数え年である。
- (注4) たとえば斎藤(1987・1992)では、江戸後期の死亡構造が高乳児死亡を最大の特徴にしたと述べている。
- (注5) 死亡者指数は、菊地(1980)およびそれに依拠した鬼頭(2000)の第5章でも用いられている。近年、筆者の両名は死亡者指数を指標とした過去帳研究に取り組んでいる。くわしくは、杉山(2004)を参照されたい。同稿では、菊地・鬼頭の被害率という名称を死亡者指数と改めた。本稿もその呼称を継承している。
- (注6) 死亡者数がどれだけ増加したとき、それを死亡クライシス(死亡危機)と呼ぶことができるかは、先行研究においても意見が分かれている。この点は、高木(1996) 1-2頁、あるいは木下(2002) 26-27頁にくわしい。本稿では、平年死亡者数からの50%増を死亡クライシスの発生とみている。
- (注7) 「万世見聞相場記」は阿部(2004) 218-305頁、「咄の種瓢」は鶴岡市史編纂会(1988) 315-327頁および同(1989) 284-302頁、「堀文庵日記」は同(1989) 303-324頁、また大山町史刊行委員会(1968)も参照した。
- (注8) たとえば鬼頭宏は、江戸時代の死亡率に関する特徴として、「地域差の大きかったことも

特徴である。人口危機はしばしば局地的であり、隣り合う2つの領域で全く異なる現象が見られる場合すらあった」と述べている（鬼頭、2000、157頁）。

- （注9）菊池（1986）、22-23頁掲載の数値に基づき算出した。同書は歴史災害研究という観点から過去帳に注目し、全国各地の寺院死亡者数を収録している。庄内地方からは10ヶ寺を収録しているが、数値の不備や零細性等の理由で5ヶ寺を除き、表示した5ヶ寺を分析対象に選んだ。なお同書は、各寺院における死亡者総数の年次推移だけを掲載している。男女別・月別の死亡数、所在地以外の各寺院に関する情報は載せられていない。
- （注10）妙法寺は港町の酒田、光岩寺は庄内藩支藩の城下町・松山にあったため、この2ヶ寺は町場の寺ともいえよう。もっとも単なる立地面からは、檀家集団の性格、たとえば商人や武士が中心等とは即断できない。周辺村の農民層を広く含む可能性もありえる。他の3ヶ寺は農村部の寺であり、所在村の農民層が檀家の主体であったと考えるのが自然であろう。
- （注11）ちなみに明治12年（1879）は全国的に流行したコレラが庄内地方にも広がり、多数の感染者・病死者を出したと記録されている（山形県、1984、422頁参照）。

死亡構造

1) 平常年の特徴

年齢別分布

専念寺の死亡者指数における年齢差・男女差は大きく、年齢や性別によって死亡傾向が異なるといった死亡構造上の基本的特徴が明らかとなった。それをふまえて、本稿の主要課題である死亡構造（＝死亡者の年齢別・性別・月別分布）の分析に入りたい。

江戸期の死亡構造を取り上げた先行研究の多くは、平常年と大量死亡の発生年すなわち高死亡年、両年次の存在を意識しつつも、分析上ほとんど注意を払っていない。死亡構造の分析を深めるためには、高死亡年と平常年とを明確に区別する必要がある。一般に大量死亡の発生時には、平常時とは異なる特有の死亡傾向がみられると言われている。そのため、死亡構造の分析に際しては、平常年における平均的な死亡者傾向を把握することが重要となる。本稿では、死亡者指数に基づき両年次を区別して、死亡構造の分析を進めることにした。本節では、専念寺の平常年だけを選び出して、死亡者の年齢別分布と月別分布をみていく。ちなみに平常年は分析対象57ヶ年のうち、42ヶ年（73.7%）

を占めていた。

表3 - 1は死亡者の年齢別分布を表示している。死亡年齢の記載率の低さに阻まれ、前章の死亡者指数表と同様、粗い年齢区分となっている。それでも分析上の一定の指標にはなりえよう。なお年齢は元の記載通りの数え年である。平常年（全年次）に加え、高死亡年4ヶ年も表示した。

平常年の死亡者は15歳未満、15歳以上男性、15歳以上女性という区分で見れば、表示のように、ほぼ3分割されている。高死亡年との比較において、年齢別分布にみる平常年の第1の特徴といえよう。平常年と合わせて表示した4ヶ年の分布状況にもあらわれているように、高死亡年にはこのバランスが崩れていた。

また、男女合わせた15歳以上の成人層が66.7%であったのに対して、15歳未満の年少層は33.3%となっていた。江戸後期の死亡構造に関して、乳幼児を中心に子供の死亡者が多かったという傾向は数多く報告されてきた。すでに述べておいたように、死亡構造の江戸期的特質として最も強調される点でもある。こうした他地域の事情をふまえて、専念寺の場合は死亡者全体の約3割が、15歳未満の年少者で占められたという傾向を、平常年の第2の特徴にあげておく^(注1)。

年齢別分布に関連づけて死亡者の男女比をみると、15歳未満の309人は男163人・女146人で52.8%・47.2%、15歳以上の619人では男317人・女302人で51.2%・48.8%になっていた。年少層と成人層の間で、男女比に大きな差は認められない。これが平常年の第3の特徴である。この傾向も第1の特徴と同じように、高死亡年では異なる傾向を示す年次が見受けられる。

たとえば、年齢別の分布状況が示すように、文久2年（1862）には15歳以上の女性死亡者が大幅に増加した^(注2)。その結果、15歳以上の死亡者にみる男女比は男39.3%、女60.7%となっている。

表3 - 1 専念寺死亡者の年齢別分布

(人・%)

	平常年	天保5年	安政6年	文久2年	明治2年
15歳未満	309 (33.3)	12 (18.8)	22 (53.7)	12 (30.0)	20 (50.0)
15歳以上男性	317 (34.2)	25 (39.1)	10 (24.4)	11 (27.5)	11 (27.5)
15歳以上女性	302 (32.5)	27 (42.2)	9 (22.0)	17 (42.5)	9 (22.5)
合 計	928 (100.0)	64 (100.0)	41 (100.0)	40 (100.0)	40 (100.0)

月別分布

年齢別分布に続けて死亡者の月別分布を取り上げる。死亡者発生の季節変動つまり死亡の季節性という面から死亡構造の特徴に迫ろうとする分析である。江戸期の庶民について、寺院過去帳を除くと、正確な死亡年月日を記録した史料は少ない。宗門改帳には死亡年月日を記さない様式が多くなっていた。そのため死亡の季節性に関する研究報告は限られている^(注3)。過去帳において、命日は必須の記載項目であったから、過去帳の利点が最も生かされる分析といえよう。専念寺の場合も、過去帳に載せられた全死亡者について、死亡年月日が明らかとなっている。

表3 - 2は平常年の死亡者について、月別分布を表示している。死亡月は数え年で示した年齢と同様、元の記載通りの旧暦である^(注4)。まず死亡者全体(表中合計)の764人を見ると、1ヶ月当たりの平均死亡者数は約64人で、1月を頂点として2・3・8・11・12月に平均を超える死亡者が発生していた。とくに1・11・12月の死亡は多く、この3ヶ月で年間死亡者の3割を占めた計算になる。反対に、死亡者が最も少ないのは6月で、5月と10月が続いていた。年間を通して5・6月が死亡者の比較的少ない時期であったと理解できる。

死亡の季節性については、20世紀初頭以来の時系列的変遷を分析した朧山(1971)の研究によって、文明の発達や社会の進歩とともに、夏季集中型から冬季集中型へ移行するという観察結果が示されている。これを前提に鬼頭(1998)では、過去帳等からの情

表3 - 2 平常年死亡者の月別分布

(人・%)

	15歳未満	15歳以上男性	15歳以上女性	合計
1月	37 (15.7)	24 (8.9)	26 (10.1)	87 (11.4)
2月	17 (7.2)	20 (7.4)	30 (11.6)	67 (8.8)
3月	24 (10.2)	22 (8.1)	20 (7.8)	66 (8.6)
4月	18 (7.7)	23 (8.5)	23 (8.9)	64 (8.4)
5月	17 (7.2)	17 (6.3)	19 (7.4)	53 (6.9)
6月	3 (1.3)	23 (8.5)	15 (5.8)	41 (5.4)
7月	15 (6.4)	32 (11.8)	16 (6.2)	63 (8.2)
8月	14 (6.0)	29 (10.7)	25 (9.7)	68 (8.9)
9月	22 (9.4)	20 (7.4)	19 (7.4)	61 (8.0)
10月	17 (7.2)	21 (7.7)	15 (5.8)	53 (6.9)
11月	26 (11.1)	21 (7.7)	22 (8.5)	69 (9.0)
12月	25 (10.6)	19 (7.0)	28 (10.9)	72 (9.4)
合計	235 (100.0)	271 (100.0)	258 (100.0)	764 (100.0)

報を検討した結果、江戸後期の季節性に関する一般的傾向として、総死亡者の分布は夏季に集中するという点を強調している。つまり死亡者全体で見れば旧暦7月を中心に、6月から8月の夏季に死亡者が集中するというのである。

大山村の場合、専念寺の過去帳からみる限り、7・8月中心の夏季集中型とは明らかに異なる死亡の季節性が確認できる。11月から1月の冬場を中心に死亡者が増加する、いわば冬季集中型といえよう。この季節型の存在を、死亡者の月別分布からみた平常年の特徴として注目しておく。高死亡年によっては、冬季集中型という平常年の季節型が大きく崩れている年次が見られる。たとえば、安政6年(1859)には9月と11月に死亡者が集中しており、2ヶ月で年間死亡者の半分を占めていた。

もっとも、これは総死亡者の分布状況、つまり死亡者全体の月別分布からみた傾向であって、表3-2からも分かるように年齢別・男女別での変動は大きかった。くわしく述べると、15歳未満の年少死亡者は1・3・9・11・12月に増加するが、冬季集中型という傾向で総死亡者とはほぼ一致している。1月を頂点に、11月から1月の死亡者は年間死亡者の4割に近づいていた。15歳以上女性の場合も総死亡者の傾向に近い。ただし1ヶ月遅れで12月から2月という冬から初春の3ヶ月に、年間死亡者の3割が発生している。15歳以上男性の分布はかなり異なる。年少者や成人女性の死亡が増える冬場には、さしたる増加は起こっていない。その一方で、7・8月という盛夏から初秋に増加する点が特徴的である。また15歳未満の年少層と15歳以上の成人層とを比べたとき、男女ともに成人層だけに、8月の死亡者増加がみられる点は興味深い傾向といえる。

このように年齢別・男女別で死亡者の月別分布をみてみると、冬季集中型という平常年の特徴は、年少者・成人女性の死亡者が冬場に集中するといった当時の死亡傾向を反映したものであったと解釈できる。年少者や成人女性の社会状況や生活様式等、検討材料が不足しており、こうした現象の背景について、くわしい解明は今後の課題としたい。本稿では、江戸後期の庄内地方における死亡の季節性について、冬季集中型という平常時パターンの存在を確認するととどめておく。全国的には、夏季集中という傾向が強調されており、死亡者の冬季集中は庄内農村における死亡構造の地域的特質として注目できるであろう。

2) 高死亡年の特徴

ここでは、平常年との死亡実態の違いに注目しながら、高死亡年の死亡構造を分析する。先行の研究事例で見られるように、高死亡年の死亡者数を合計して、全体で平常年

との比較を行う方法はとらない^(注5)。大量死亡の様相は一律ではなく、高死亡年ごとに異なる死亡者分布や死亡実態がみてとれるからである。

高死亡年4ヶ年の死亡者について、先の表3 - 1は年齢別分布を表示している。死亡者指数の年齢差・男女差をみるなかで浮かび上がった高死亡年ごとの死亡傾向が、よりはっきりととらえられる。平常年の数値を合わせみたとき、4ヶ年の分布状況はいずれも異なっている。天保5年(1834)は15歳以上の死亡者急増、安政6年(1859)と明治2年(1869)は15歳未満の死亡者増加、文久2年(1862)は15歳以上の女性死亡者増加に、それぞれ特徴的な傾向をみとめることができる。先行研究でも、しばしば指摘されたことではあるが、大量死亡の発生時には、やはり平常時とは異なる特有の死亡構造が現れると確認できよう。

死亡構造の分析を進めるにあたっては、こうした高死亡年特有の死亡構造を作り出した死亡実態の特徴を明らかにする必要がある。しかし4ヶ年に関して、大量死亡の原因に関する情報は限られている。表2 - 1に掲げたような事項と、大山村の村落状況との関係は、明確ではない。そこで本節では4ヶ年のうち、江戸末期を代表する高死亡年であった天保5年(1834)だけを、試論的に取り上げてみることにした。

天保5年(1834)の死亡者指数は2.45に達し、平常年の2倍を大きく超える死亡者の発生がみられた。この数値からみる限り、大山村を襲った江戸末期最大のクライシス年であったと考えられる。

表3 - 1で死亡者の年齢別分布をみると、15歳未満の比率が減少する一方で、15歳以上が大きく上昇している。これは15歳未満に比べて、15歳以上の死亡者数が急増したためであった。年少層での死亡者急増が多発する分析期間中であって、こうした成人層での顕著な死亡者増は、その年の死亡構造を特徴づける数少ない事態であった。

15歳以上の成人死亡者は男女ともに増加したが、女性が男性をやや上回っていた。死亡者に占める比率でみると、平常年から男性は4.9%、女性は9.7%の上昇となる。また死亡者の男女比でみても、15歳未満は男50.0%・女50.0%、15歳以上は48.1%・51.9%で、前節で示した平常年の数値に比べ、女性の比率が上昇していた^(注6)。

天保5年(1834)の大量死亡については、当然のこととして、天保飢饉の影響を考えなければならない。天保飢饉とは、天保年間の異常気象によって発生した全国的な凶作・飢饉を指す。被災地域の広さから、江戸期の飢饉のなかで最大のものと言われ、全国各地で大量死亡の発生も伝えられている^(注7)。

庄内地方でも天保4・6・7・10・12年と連続的な凶作に襲われ、飢饉となり、飢餓

や疫病の発生等が記録されている。天保5年(1834)は凶作ではないが、前年の4年は未曾有の大凶作で、「巳年飢饉」と呼ばれ、後世にまで言い伝えられる大飢饉の年であった。その「巳年飢饉」の影響のもとで、翌5年の大量死亡が発生したと考えるのが自然であろう。

天保5年(1834)については、表2-1の参照事項にあげたように「悪風流行」や「疫病大流行」との記録が確認できる。大山村からもさほど遠くない新形村の百姓・徳兵衛は、自らの見聞記に、同年5月下旬頃、「去巳年秋より悪風流行、人多く死す、町方五月初三千五六人死すとの沙汰也^(注8)」と書き留めていた。「町方」とは鶴岡城下のことを指すが、大山村でも「悪風流行」はみられたのであろう。

表3-3は、天保4・5年(1833・34)における死亡者の月別分布を示している。実は15歳以上の成人死亡者でみると、4年にも男女ともに大幅な増加がみとめられたのである(この点は表2-3・2-4の死亡者指数参照)。よって兩年の死亡者分布を続けてみると、徳兵衛の記載を裏付けるように、巳年すなわち天保4年の秋10月から、翌5年の6月にかけて死亡者の山が認められる点に注目したい。専念寺過去帳にみられる大量死亡者も、徳兵衛のいう「悪風流行」による死亡者急増の結果と解釈できよう。

天保飢饉下での疫病流行は、全国各地で記録されており、大量死亡の発生には正確な病名はひとまず置くとしても、何らかの伝染病が影響していたとの見解が、研究者間での共通認識となっている^(注9)。庄内地方においても天保飢饉下、栄養失調となった人々の間で「傷寒病」が流行したと伝えられている^(注10)。徳兵衛の言葉をそのまま取れば、「悪風」とは現在の流行性感冒(インフルエンザ)を指すのではないだろうか。傷寒とは、激しい熱病、腸チフス等であったと言われることが多い。ただし、もともと傷寒なる病名の範囲は広く、江戸時代を通じて、感冒の重いものも一般に傷寒と呼ばれていた^(注11)。よって「悪風」と「傷寒病」は

表3-3 天保4・5年死亡者の月別分布 (人・%)

天保4年	合計	天保5年	合計
1月	1(2.9)	1月	6(9.4)
2月	2(5.7)	2月	8(12.5)
3月	0(0.0)	3月	7(10.9)
4月	2(5.7)	4月	11(17.2)
5月	6(17.1)	5月	7(10.9)
6月	1(2.9)	6月	9(14.1)
7月	0(0.0)	7月	0(0.0)
8月	3(8.6)	8月	2(3.1)
9月	3(8.6)	9月	1(1.6)
10月	4(11.4)	10月	5(7.8)
11月	5(14.3)	11月	4(6.3)
12月	8(22.9)	12月	4(6.3)
合計	35(100.0)	合計	64(100.0)

同一の伝染病を指すとも考えられるが、現在のところ、両者の関係を明らかにする材料をもたない。

死亡構造の特質という点からすれば、正確な病名が何であるかよりも、「悪風」や「疫病」と記録されたある種の伝染病が、死亡者分布をみたとき、15歳未満の年少層よりも、15歳以上の成人層をより強くとらえていたことの方が重要であろう^(注12)。

仮説の域をでないが、天保5年(1834)の死亡実態については、天保4年の大飢饉の影響で食糧事情・栄養状態が悪化するなか、成人層を中心に伝染病が蔓延し、大量死亡が発生したと解釈しておきたい。

自治体史をはじめ庄内地域史の先行研究において、天保飢饉の経過や庄内藩の対策等は触れられているが、大量死亡の有無や具体的な死亡者傾向に関わる記述はほとんどみられない^(注13)。専念寺の過去帳から天保5年(1834)の大量死亡を確認し、成人層中心の「悪風流行」をその原因とみた本稿分析の意義は小さくないといえよう。

(注1) 平常年において、15歳未満の年少死亡者が死亡者の33.3%という数値には疑問が無いとはいえない。高・中死亡年を合わせた57ヶ年の全死亡者でも、その比率は35.1%であった。杉山(2004)が分析した安芸国賀茂郡の寺院過去帳では、同一期間の全死亡者に占める15歳未満の比率は60.3%に達していた(平常年だけに限っても59.2%)。したがって、専念寺過去帳において、乳幼児を中心に過小記載の傾向が存在するのではないかと考えられる点を付記しておく。本稿では、ひとまず考察の外におき、今後の検証課題としたい。

(注2) 文久2年(1862)にみられた成人女性死亡者の増加については、表2-1の参照事項に示したような、麻疹いわゆるはしかの流行が強く関係していたと考えられる。「万世見聞相場記」(阿部、2004、226-305頁)には、同年について、鶴岡城下でははしか流行による女性死亡者の急増が記載されている。

(注3) 本格的に取り組んだものとしては、鬼頭(1998)がみられるだけである。同稿の分析結果は、鬼頭(2000) 162-168頁でも紹介されている。

(注4) 月別分布の分析対象は、改暦の問題があり、明治5年(1872)までの死亡者に限定した。よって平常年の表示について、年齢別分布の死亡者総数と月別分布のそれとは一致しない。また閏月を、平常年の月別分布からは全て除外し、高死亡年ではそのままとした。

(注5) たとえば、鬼頭(2000) 156-185頁、木下(2002) 23-43頁、高木(1996) 1-32頁があげられる。

- (注6) 天保飢饉の大量死亡に際して、死亡者の増加率に男女差がみられたかどうかは、先行研究が関心を寄せている点である。たとえば高木(1996) 16 - 17頁、木下(2002) 35頁参照。しかし研究事例が不足しており、一定の見解は得られていない。
- (注7) 天保飢饉については、大飢饉としての認知度に比して、大量死亡の発生という面からの実態説明は遅れている。本格的に取り組んだ研究報告はきわめて少ない。過去帳の事例研究として青木(1967) 須田(1973) 歴史人口学研究として、鈴木(1984) 高木(1996)をあげておく。
- (注8) 「万世見聞相場記」天保5年5月(阿部、2004、229頁)より引用。
- (注9) 天保飢饉下で流行した疫病について、病名や大量死亡への実際的影響に関する見解は一致していない。たとえば「天保の crisis は単なる凶作による飢饉ではなく、むしろ急性の伝染病(消化器系の病気かはしか)によるものではないか、と思われる」(速水、1983、287頁)や、「流行病の主体は痘瘡・麻疹・感冒などであって、飢餓や栄養不良との相乗効果がそれほど強く作用していたわけではない」(斎藤、2000、34頁)等が見られる。
- (注10) 鶴岡市史編纂会(1998) 60頁参照。
- (注11) 富士川(1969) 269頁参照。
- (注12) 過去帳による研究事例をみたとき、本稿分析と同様に、成人死亡者の急増という死亡傾向が共通して確認されている。須田(1973)の飛騨の事例、高木(1996)の陸奥の事例参照。成人層を中心に伝染病が流行し、大量死亡の発生につながるという事態が、全国各地でみられたのではないだろうか。
- (注13) 庄内地方の天保飢饉については、たとえば、鶴岡市史編纂会(1998) 59 - 62頁、鶴岡市役所(1962) 389 - 402頁、山形県(1987) 814 - 818等に記述がみられる。

むすびにかえて

はじめに述べておいたように、江戸時代の農村地域社会における死亡者の傾向や死亡の実態を取り扱った事例分析は少なく、それらの特徴についても未解明の部分が多い。

本稿では、出羽国田川郡大山村の1寺院・専念寺の過去帳を基礎資料にして、江戸末期の庄内農村における死亡構造を分析した。

死亡構造上にみられた基本的特徴は、年齢や性別によって死亡傾向がかなり異なっていたことである。死亡者分布にみられた年齢差・男女差は大きく、死亡構造を複雑なも

のとしていた。全国各地の研究事例と共通する傾向も多かったが、その一方で庄内独自の傾向も認められた。なかでも全国的な夏季集中とは異なる、死亡者の冬季集中という傾向等は、死亡構造上の地域的特質として強調できよう。

また、大山村をはじめ、庄内地方の多くの村々が10数年にはほぼ一度の割合で、大量死亡に見舞われていたことも確かめられた。こうした大量死亡の発生も、死亡構造を複雑化させる傾向があった。伝染病など、大量死亡を誘発する要因が、特定の性別や年齢層に作用して、死亡実態を特徴づけたためである。

さらに庄内平野の内部にあってさえ、死亡傾向の地域差は大きかった。本稿分析を通じて、筆者両名は、この狭い領域内での地域差の存在こそが、江戸期の死亡構造を特徴づける、いわば死亡構造の江戸期的特質の最たるものと考えている。現在の農村地域社会の原型がほぼ形づくられた江戸後期の庄内農村は、村落構造の多様性をもってその特徴としたという^(注1)。そうした村落構造の多様性を持っていた時代、村人の死亡の様相も、また村ごとに多様で、一律ではなかったということであろう。

詳細な分析結果については前述のとおりである。それらをふまえ、残された課題を付記して、むすびにかえたい。

江戸期の死亡構造については、地域差と並んで、階層間格差が存在する可能性が指摘されている^(注2)。庄内農村については、江戸後期の農民層分解に関連して、諸階層の存在形態に触れた事例報告が散見される。それらをふまえれば、農民層内部で死亡傾向に階層差がみられ、諸階層の存在形態に応じて、死亡実態にも差異が生じていたと考えられなくもない。

そうした観点で分析結果の位置付けを述べておきたい。専念寺の檀家には、有力商家を含む、在郷町・大山の商人層が多かったことは、本論中でも触れた。したがって本稿で明らかとなった大山村の死亡構造は、百姓身分の商人を中心とした比較的上層住民の死亡傾向を反映しているのではないかと考えられよう。あえて本稿題名を在郷町の死亡構造とした理由でもある。

もっともこれは、実際に、死亡傾向に階層間格差が存在したのかという問題とも関連し、他村の死亡構造との比較の中で検証すべきであろう。筆者両名は江戸後期の庄内農村を対象に、階層間格差の存在を意識した死亡構造研究を構想しており、本稿はその準備作業にあたるのである。

(注1) 豊原研究会編(1978)、11 - 20頁参照。

(注2) たとえば鬼頭(2000) 178 - 179頁参照。

〔付記〕 専念寺過去帳を含む専念寺文書の利用にあたっては、鶴岡市郷土資料館と大山・専念寺のご理解、ご協力を得た。とくに記して感謝する次第である。

引用文献

阿部英樹、1994、『近世庄内地主の生成』日本経済評論社。

阿部英樹、2004、第7章「史料紹介 万世見聞相場記」同著『近世農村地域社会史の研究』勁草書房、226 - 305頁。

青木大輔、1967、『寺院の過去帳からみた岩手県の飢饉』奥羽史談会。

大柴弘子、1999、「過去帳死亡者の母集団人口と社会背景 - 18世紀以降近江三上地域における社会調査から - 」『人口学研究』第24号、57 - 66頁。

大山町史刊行委員会、1968、『大山町史』大山町史刊行委員会。

菊池万雄、1980、『日本の歴史災害 - 江戸後期の寺院過去帳による実証 - 』古今書院。

菊池万雄、1986、『日本の歴史災害 - 明治編 - 』古今書院。

鬼頭宏、1998、「もう一つの人口転換 - 死亡の季節性における近世的形態の出現と消滅 - 」『上智経済論集』第44巻第1号、11 - 34頁。

鬼頭宏、2000、『人口から読む日本の歴史』講談社。

木下太志、2002、「徳川時代におけるクライシス期の死亡構造」速水融編『近代移行期の人口と歴史』ミネルヴァ書房、23 - 43頁。

斎藤修、1987、「明治 Mortality 研究序説 - 東京都下国分寺の資料を中心に - 」『経済研究』第38巻第4号、321 - 332頁。

斎藤修、1992、「人口転換以前の日本における mortality - パターンと変化 - 」『経済研究』第43巻第3号、248 - 267頁。

斎藤修、2000、「飢饉と人口増加速度」『経済研究』第51巻第1号、28 - 39頁。

杉山聖子、2004、「近世後期から昭和戦前期の瀬戸内農村における死亡構造の時系列的分析 - 広島県賀茂郡中黒瀬村の寺院過去帳を事例として - 」『農業史研究』第38号、38 - 48頁。

鈴木一、1984、「1山村の天保クライシス - 武蔵国多摩郡沢井村 - 」『地方史研究』第34巻第3号、35 - 47頁。

須田圭三、1973、『飛騨〇寺院過去帳の研究』医療法人生仁会。

高木正朗、1996、「19世紀東北農村の死亡危機と出生力」『社会経済史学』第61巻第5号、1 - 32頁。

- 圭室文雄、1999、『葬式と檀家』吉川弘文館。
- 鶴岡市史編纂会、1988、『鶴岡市史資料編 荘内史料集16 - 2 明治維新史料 明治期』鶴岡市。
- 鶴岡市史編纂会、1989、『鶴岡市史資料編 荘内史料集16 - 1 明治維新史料 幕末期』鶴岡市。
- 鶴岡市史編纂会、1998、『鶴岡市史資料編 荘内史料集13 庄内藩農政史料 上巻』鶴岡市。
- 鶴岡市役所、1962、『鶴岡市史 上巻』鶴岡市役所。
- 豊原研究会編、1978、『豊原村』東京大学出版会。
- 平凡社、1990、『日本歴史地名大系第6巻 山形県の地名』平凡社。
- 浜野潔、2001、「気候変動の歴史人口学 - 天保の死亡危機をめぐって - 」速水融・鬼頭宏・友部謙
一編『歴史人口学のフロンティア』東洋経済新報社、173 - 192頁。
- 速水融、1983、「幕末・明治期の人口趨勢 - 空白の四半世紀は？ - 」安場保吉・斎藤修編『数量経
済史論集3 プロト工業化期の経済と社会』日本経済新聞社、279 - 304頁。
- 富士川遊、1969、『日本疾病史』平凡社。
- 丸山博、1960、「伊賀国大善寺過去帳からみた1688年から1958年にわたる270年間の死亡者の年齢に
ついて」『民族衛生』第26巻第1号、143頁。
- 初山政子、1971、『疾病と地域・季節』大明堂。
- 山形県、1984、『山形県史 第4巻』巖南堂書店。
- 山形県、1987、『山形県史 第3巻』巖南堂書店。